

後方羊蹄日誌

左院

全

					和書門
一	八	八	八	八	類
冊	架	函	號	號	

庫文閣内			
七	八		和
函	一	八	書
一	八		
〇	八	四	類
架	冊	號	類

内閣文庫	
番號	和 8884
冊數	17 (15)
函號	178 242



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak 2007 TM: Kodak



然るに戊午の夏蒙函館府は

希知の洞のゆり不将^{イレカリ}取ユツツ越新道極^{トヒヒラ}平へ山を開^{イレカリ}發^{トヒヒラ}の得失を實
探^{ヒキ}の^{セツ}め^{ケレヒヤウ}枝^{アブタ}を^{アブタ}望^{アブタ}氷^{アブタ}の上^{アブタ}柁^{アブタ}田^{アブタ}より山^{アブタ}入^{アブタ}坂^{アブタ}方^{アブタ}羊^{アブタ}蹄^{アブタ}より路^{ルササン}冬^{ルササン}より春^{ルササン}
よ越^{キモウハ}氣^{キモウハ}毛^{キモウハ}より山^{ルササン}入^{ルササン}坂^{ルササン}方^{ルササン}羊^{ルササン}蹄^{ルササン}より路^{ルササン}冬^{ルササン}より春^{ルササン}
三卷^{ルササン}を^{ルササン}集^{ルササン}併^{ルササン}を^{ルササン}開^{ルササン}路^{ルササン}の^{ルササン}可^{ルササン}否^{ルササン}と^{ルササン}一^{ルササン}枚^{ルササン}の^{ルササン}地^{ルササン}圖^{ルササン}を^{ルササン}府^{ルササン}庫^{ルササン}に^{ルササン}納^{ルササン}じ^{ルササン}今^{ルササン}主^{ルササン}記^{ルササン}を^{ルササン}
今^{ルササン}之^{ルササン}要^{ルササン}を^{ルササン}摘^{ルササン}て^{ルササン}一^{ルササン}書^{ルササン}と^{ルササン}し^{ルササン}大^{ルササン}概^{ルササン}を^{ルササン}同^{ルササン}辭^{ルササン}の^{ルササン}ま^{ルササン}ゝ^{ルササン}示^{ルササン}す^{ルササン}人^{ルササン}と^{ルササン}示^{ルササン}す^{ルササン}の^{ルササン}形^{ルササン}
形^{ルササン}を^{ルササン}密^{ルササン}を^{ルササン}開^{ルササン}か^{ルササン}り^{ルササン}ん^{ルササン}と^{ルササン}欲^{ルササン}す^{ルササン}は^{ルササン}人^{ルササン}と^{ルササン}示^{ルササン}す^{ルササン}の^{ルササン}風^{ルササン}土^{ルササン}人^{ルササン}情^{ルササン}を^{ルササン}
開^{ルササン}望^{ルササン}の^{ルササン}可^{ルササン}否^{ルササン}を^{ルササン}問^{ルササン}ふ^{ルササン}る^{ルササン}百^{ルササン}是^{ルササン}も^{ルササン}一^{ルササン}閱^{ルササン}よ^{ルササン}し^{ルササン}ん^{ルササン}
安^{ルササン}政^{ルササン}の^{ルササン}未^{ルササン}暮^{ルササン}春^{ルササン}於^{ルササン}江^{ルササン}戸^{ルササン}牛^{ルササン}込^{ルササン}杉^{ルササン}並^{ルササン}の^{ルササン}五^{ルササン}爪^{ルササン}龍^{ルササン}窟^{ルササン}源^{ルササン}に^{ルササン}弘^{ルササン}志^{ルササン}す^{ルササン}人^{ルササン}

戊後方羊蹄日誌

伊勢 松浦竹四郎 著

安政五^{イレカリ}年^{イレカリ}正月^{イレカリ}十一^{イレカリ}日^{イレカリ}箱^{イレカリ}館^{イレカリ}府^{イレカリ}に^{イレカリ}於^{イレカリ}て^{イレカリ}東^{イレカリ}部^{イレカリ}柁^{イレカリ}田^{イレカリ}より不^{イレカリ}持^{イレカリ}取^{イレカリ}極^{イレカリ}平^{イレカリ}へ山^{イレカリ}
道^{イレカリ}河^{イレカリ}切^{イレカリ}開^{イレカリ}方^{イレカリ}の^{イレカリ}得^{イレカリ}失^{イレカリ}實^{イレカリ}探^{イレカリ}を^{イレカリ}危^{イレカリ}せ^{イレカリ}れ^{イレカリ}而^{イレカリ}日^{イレカリ}お^{イレカリ}人^{イレカリ}を^{イレカリ}力^{イレカリ}旅^{イレカリ}中^{イレカリ}一^{イレカリ}刀^{イレカリ}を^{イレカリ}餘^{イレカリ}の^{イレカリ}較^{イレカリ}件^{イレカリ}
を^{イレカリ}向^{イレカリ}ふ^{イレカリ}と^{イレカリ}想^{イレカリ}て^{イレカリ}伺^{イレカリ}の^{イレカリ}も^{イレカリ}と^{イレカリ}す^{イレカリ}由^{イレカリ}有^{イレカリ}り^{イレカリ}と^{イレカリ}田^{イレカリ}某^{イレカリ}諸^{イレカリ}君^{イレカリ}も^{イレカリ}白^{イレカリ}場^{イレカリ}に^{イレカリ}ラ^{イレカリ}サ^{イレカリ}ル^{イレカリ}ベ^{イレカリ}ツ^{イレカリ}道^{イレカリ}同^{イレカリ}を^{イレカリ}
致^{イレカリ}し^{イレカリ}余^{イレカリ}を^{イレカリ}去^{イレカリ}林^{イレカリ}中^{イレカリ}立^{イレカリ}て^{イレカリ}杜^{ランコ}樹^{ランコ}杖^{ランコ}伐^{ランコ}出^{ランコ}り^{ランコ}方^{ランコ}等^{ランコ}お^{ランコ}候^{ランコ}致^{ランコ}す^{ランコ}ま^{ランコ}き^{ランコ}り^{ランコ}の^{ランコ}事^{ランコ}一^{ランコ}
就^{ランコ}て^{ランコ}支^{ランコ}反^{ランコ}不^{ランコ}牙^{ランコ}出^{ランコ}と^{ランコ}し^{ランコ}定^{ランコ}め^{ランコ}御^{カッラ}一^{カッラ}律^{カッラ}を^{カッラ}威^{カッラ}して^{カッラ}同^{カッラ}志^{カッラ}を^{カッラ}示^{カッラ}す^{カッラ}べ^{カッラ}し^{カッラ}と^{カッラ}
一^{カッラ}劔^{カッラ}應^{カッラ}召^{カッラ}募^{カッラ}裏^{カッラ}糧^{カッラ}出^{カッラ}塞^{カッラ}関^{カッラ}險^{カッラ}河^{カッラ}皆^{カッラ}沂^{カッラ}涉^{カッラ}大^{カッラ}岳^{カッラ}儘^{カッラ}躋^{カッラ}攀^{カッラ}筆^{カッラ}不^{カッラ}洩^{カッラ}奇^{カッラ}
絶^{カッラ}身^{カッラ}無^{カッラ}論^{カッラ}苦^{カッラ}艱^{カッラ}我^{カッラ}何^{カッラ}輕^{カッラ}性^{カッラ}命^{カッラ}此^{カッラ}役^{カッラ}重^{カッラ}於^{カッラ}山^{カッラ}

十八日正早發校を埋屋凍水にて凍令一歩改破のや馬蹄未通
 り水の幸強言の及ふよりの大建龍の本宮にサ夕山越内よ若出此を
 の人家一者の旅人の信もあはし湯如是皆夷地出秘入るを之を旅人半日
 江指より厚津部入エナラ峠を越て若新村へ出来る者も有り
 廿一日鶴鳴り園柵のあ旅人群をひきり何とも此処を切手を改む正月申
 けり二月申迄一日の人を一万も満るゆゑに繁榮まてき之刀風刺面
 凜然とて威怖の風至の裏に成るエウラツ川を餘の川とて想て望氷の上を
 埋果を又沙礫をき成下つ氷りまゝ友人を路子の徘徊は半分は氷に減
 りや穿る痕とて地の風土を吐けり互あるヤカヲシママン一は若出を海原
 を顧ねて一條の様そのやまゝとて人の路をひき安目受まおあめ

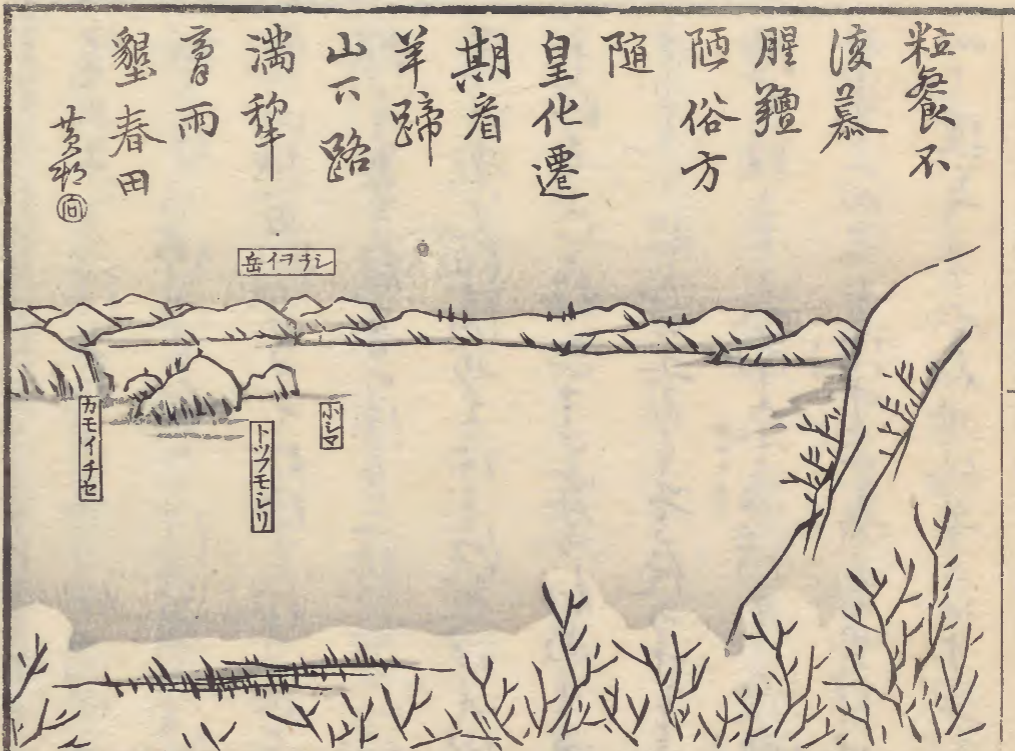
廿二日發到静新各橋を若山一懸九折き延路樹梢を踏て少と然と
 氷埋を映もよ成る故よりりも半より少一掛き了燈も少と成夜は雪ふ
 隣の近き山里の涼お思ひ出りてりりふや何も若馴も不橋よ御を就令を去
 り平らりりり餘程氷入て礼文本のよふも若一か清を輕靴とて長衣
 廿三日雇舟て社田より翌日湖を一足一白會ふ若出
 廿五日雇舟人十二名を田君と同よラサルベツよの樹たより入るに凡武里
 して流川とてるま瀑布凍令一氷箒を垂るる玉簾を懸るるや
 主裏よ一條の飛泉あるるゆり笈上透徹一日是は若映一も若氣上る
 やく恰も就燈と怪れん又是を厚原氏よ足出る時不動景向の籠も
 号るん水の凍令一と少まも亦平日の款とて一と若一又フカウシ

と云野原一里をこくオクッコフ川岸に到り山陰に宿一老人は酒を以て
 夜中一焼火一柴を以てサメモンに名帳書得理を後より一同鼓腹一
 と嚙て其無之形をく氷雪の上極く威を受へて曉まで
 廿六日氷雪の上ハナツポコマナイ丁ニ四レリコマナイをこく其杜樹ハ大
 物を一丈七八尺と云ふ丈及び了物葉子葉本なるを知らず夕方白濁宿
 廿七日時吹雪之因君法事よ到り余蛇田より石持越案内の老を
 定の白く或人イタレハココ蛇田より四人ト子シハクシヤウロクを履各米酒烟を積
 鼻渾も拭きもて山中の規定を後一本幣を以り山海の神を以り
 一同の老如河もも此先のるを業りる知ありて一をこく口は
 何もうも皆平けゆく後代あるにけおむ事やうと云

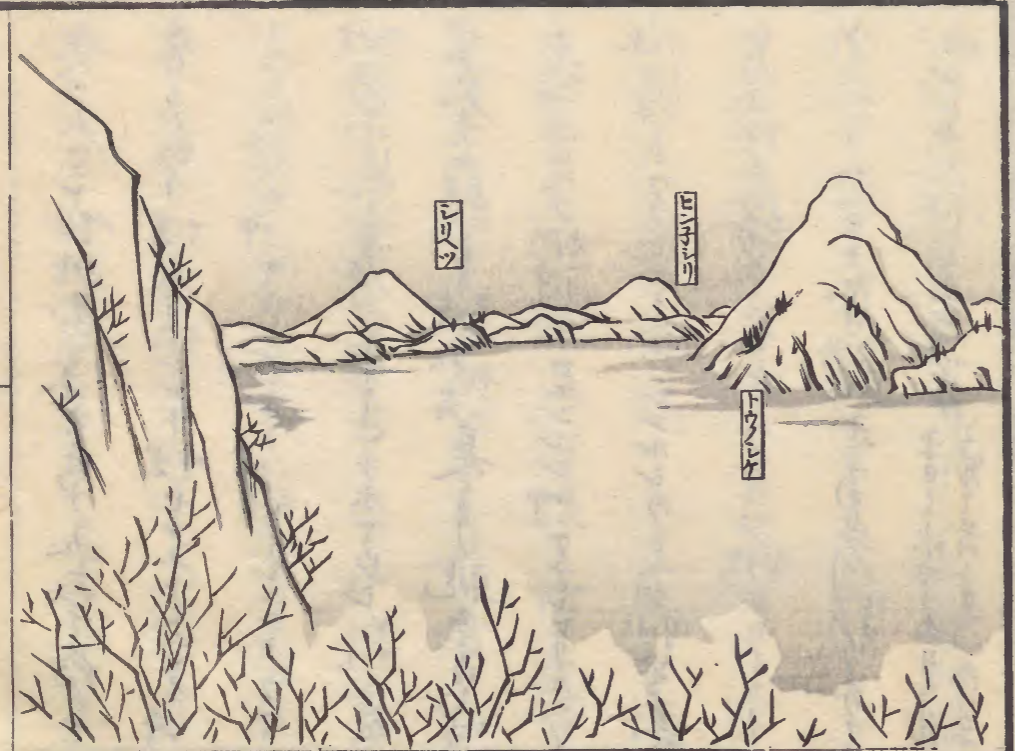


二月朔日快晴初雪破のこゝ舟五トウフルカ湖坂に到り帰及此岸は兼表
 とせんとるを主人は後を此所を向う岳たりはへロキウハレ岳有肩を
 登り仰向嶽の烟を舟中一入るまきやめりもくもく半雲一丁
 一回の岸を尻に藉是より迂りわくく須臾は湖傍より危きつり少
 曲を木立の右岸に踏いぬく依て舟を主人の頭を認ておはれ知を
 舟場場舟場場是所の舟場場云り是向岸に後舟を係垂不あきりして号し
 千ホヤウシ舟場場是所の舟場場云り是向岸に後舟を係垂不あきりして号し
 湖沿の園松之甲余を水を白のソウヘツは首をフサルツは舟中四ツの
 高岐トウノシケモシカモイナセモシトツフモシホシモシホシモシ余は己の杖馬を廻りしを湖中島を形ち
 雷益スリバチを度きうやくひり五千余を頂上一ツは法東を空にゆき文書
 も濁れさうし人是を杯水と号し号てカモイナセモシカモイナセモシ是より一ツは堂と

寛文年有徳お竹の鼻の僧圓堂ユンクウと云ふは法國の高山をとり毎に鏡を
 挺を携へて佛像を刻りて後以圓は後り太田山ニマモキイソヤ儀をユウバリユサンタル恵山垂
 新山越内社字々社仏像を彫り納ち後此島は年久未仕姑く極くは奇
 瑞を象り觀音の像を二尊作り一体をレブダヒゴキの産に納ち一体を此島小安
 置し老僧は徳お竹に江州伊吹山に入字名と云ふを入定せしや
 こそ此寺に釋加すゝ密のわ高き尊極し其仏像彫りおれた藤は
 中まきし莊丸の工をそそる候のまきし莊丸はトツフモシ莊丸是は一條の
 陸を縁きり又南トツフモシ小島トツフモシ見しはトツフモシ蝦蟇トツフモシ多き由て主人舟を号するを
 禁中トウノシケ之四忍トウノシケと沼中トウノシケと教島の神社を建んるを縁く多くの私費を
 以て建しと云ふは此後景の地中ゆく一區の名勝と稱し目を見たりと

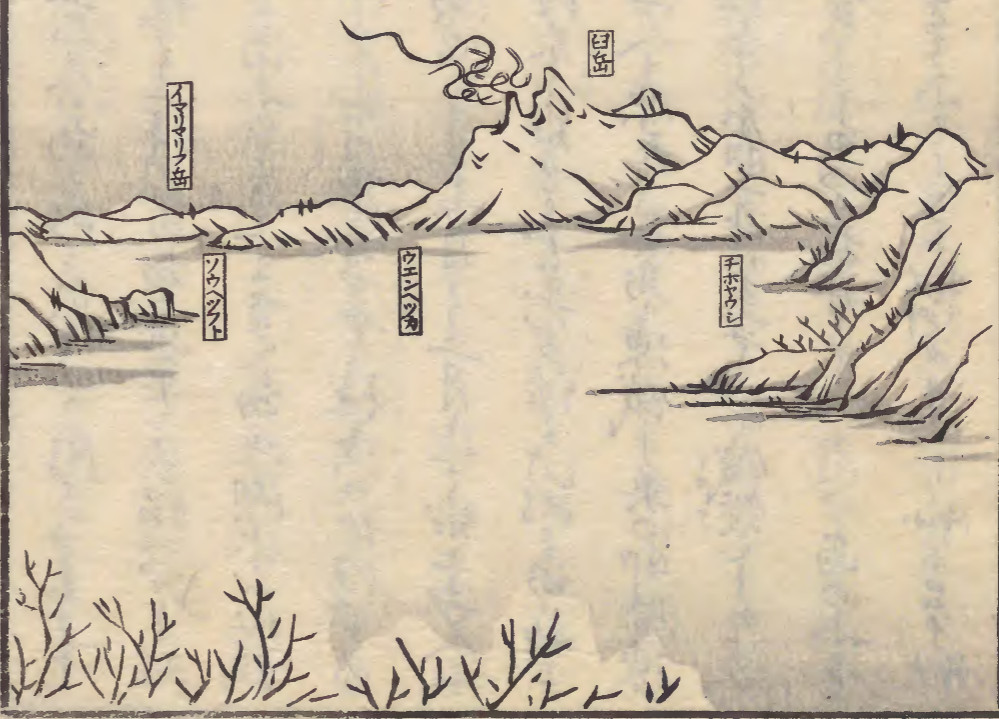


受由島中難松陰次異州多く不
 ハルリントウツルリントウ
 石就後蔓就後黃連やとちやう米蘭金
 フモカカ
 鷄御細辛翁鶴州を餘り志を和物
 出立小鳥多くて形再日引物あり
 牛乳免翁翁華錦鹿多し生音麻を
 放き由あり直よを遊り来るとや
 湖中桃花魚杜文魚泥城樹樹魚鱈菜
 ニコヒ カシカ コエシ サリガニ レッソ
 多く又鏡よいて大さ舟のや魚らと昔
 麻を衣後と麻の角と破れ所と就
 子ウレチ
 の靴子口横つりて云話らるる事小き



五尺の拍子時を遊りてあつ是
 鏡より一様子の拍子此魚シツバツコマウリス
 と尚おのころふよく相此湖水は何故
 中ん流の張るる母能美の地何もの
 湖沼とも赤月より一月迄を流上り人
 性来とあつて古光の信よ此湖の時と
 土人も凍死魚鳥も凍死魚の卵皆凍
 枯るる所翌年の魚やとて饑饉と云ふ
 実もと魚は相舟と此度の島の水を
 ちよふ子一シント
 大
 大
 大

ヲツカウレシ岬此の岸に於て五の千石を
 有と云り岬タシ子シレト岬セタエトシモイ
 レフンエンルン岬キウレエンルン岬ヒイシユントウヤ
 此の近小岸に於てチホヤウレウヤト云
 茅舎二軒と云キキキ是と云眺望する時
 岬ホロツ岬ホロエンルン岬ケナレヒリカハツ
 係フルホトウフレナイ川シニルレウレヘツ小岸系
 クホリ
 岸より岬にニセリウレコツ岬チヒイカリ
 ウレ小ソウヘツチヤロ岬のボも岬に於て
 ホンルカリ川ウエンベツカ岬目も水で毎日大能
 岬の首は是白岳の東



面此の白岳の東岸に於て赤嶺新岬
 樹木を採る時岬角に於て是を
 寸竹頂は常々燃出其等百子の雷
 を轟くや湖を隔て是を原むと風
 系茅舎の及岬の岬岬を仰る岬
 羊蹄の巔青天と云は其形を恰も
 士のや須臾に勝景と云は佇立
 に岬人岬岳を望むと岬岬を望
 岬と岬を望むと岬岬を望むと岬
 岬の頂上と岬岬を望むと岬岬を望むと岬



山部抄

絶を小舎の柱に又及新寒八月秋風餐露宿送悠々羊蹄山下一
宵雨雌岳雄峯既白頭やはり思ひを顔をむいして傍に依りて
回首昨遊經一秋雲山天半望悠々今来擬補前遊欽勇决明
朝攀上頭

二日曇天ハ上ル云々ハハノウチケツフ子イホシ又ツ野ハ不敷里ノ
平野ノ雌マ岳ヘ雄ヘ岳ヘ混コ保ホ岳ヘの禁中ノ又ホ内ウ岳チセチシリ
家ノ上ノ与テ平ノ岳ノとんとり後を頤を及湖中ノ高岐銀盤中ノ盆山の如是
ら真一文字ノ野ノ山ノはもはも論を及りてホロ又ツフ甲ノ又ツケヘツアフタ
へノハノエウトエンカルソチ輕坊ノ禁ノ到リ此道也風敷
ハノウチケツフ子イホシ又ツ野ハ不敷里ノ
平野ノ雌マ岳ヘ雄ヘ岳ヘ混コ保ホ岳ヘの禁中ノ又ホ内ウ岳チセチシリ
家ノ上ノ与テ平ノ岳ノとんとり後を頤を及湖中ノ高岐銀盤中ノ盆山の如是
ら真一文字ノ野ノ山ノはもはも論を及りてホロ又ツフ甲ノ又ツケヘツアフタ
へノハノエウトエンカルソチ輕坊ノ禁ノ到リ此道也風敷

齋明帝之
朝阿陪臣
率船師一
百八十艘
航蝦夷置
郡領而歸
雖不記兵
卒之數意
亦不下數
千百人今
子重以劍
為傑從以
跟為與馬
單身深入
遂窮阿陪
臣未到之
地豈所謂
一身渾膽
者哉

法附系ハ反是ノ云々云々ト反之故ナリト社儀也又スリ也ト又日根知
里リ社ノ地也立本祭也立印也也也也
是乃又西山ノ刀雌岳也雌岳雄岳在其傍高不及雌岳之半此書
一章之拙文也也也也也也也
知別岳者其高甲蝦夷形似富嶽故稱蝦夷富士以其在知別
河上故名土人喚之雌岳雄岳在其傍高不及雌岳之半此書
記所謂後方羊蹄者也蓋也也也也也
齋明之朝置政所之旧址知別即後方羊蹄轉音也土人嘗告
余以山神之靈故余有意于置其祠于兩嶽下而未果今茲
二月二日將赴石狩歷沼傍出干雄岳下此乃相置祠之地

山部抄
八

東國評多
悉志樓於
可謂盡心
焉耳矣而
此行也臨
崢嶸不測
之深繩索
相引亦有
如超縣度
之險者古
歌曰三朝
三兼黃牛
如故言上
峽舟行之
難也太白
亦曰三朝
又三暮不
覺鬢成絲
水行之難
可以見矣

表木幣而去、三日宿樅原、此地登雌岳既二分許、煮雪作粥、殺貂為炙、立木幣而拜岳、山中巨樹凍裂如地震、終宵不寐、漢名鳳尾松四日天未白、著鐵楯而攀、登四分日漸出、九折而進、刀風刺面、然汗流浹背、愈知險難、天色已晴、惠山駒岳、曰繪鞆、白老皆在襟帶之間、登六分、無樹、登八分、險愈甚、步愈艱、午後漸達山巔、巔如富岳巔而凹、周廻一里半許、冬日熊蟄凹中、土人待春而獲之云、余時促歸、故不能獲一頭、願從行者如有恨色、四顧則混保、在西、岩内、輿市、古平岳、在北、支骨、察繩、垂舞岳、在東南、而松前、江指、函館之諸山、出沒於雲烟之際、寒威透骨、不可久留、

藉蓑帽蹲踞而下、日暮達昨宿處、

五日取路於摩渴利別源、又相後方羊蹄之祠地、日暮抵路參、蓋知別西岨也、抵柳多宿漁舍、蓋去秋所過之地也、

此處岳の長尾烈々、身を以て倚さるゝ又中の吹雪の起るに、わらわく志々、積りの、踏留程々、首限りの、おなほ、今より、敷度辛くして、摩

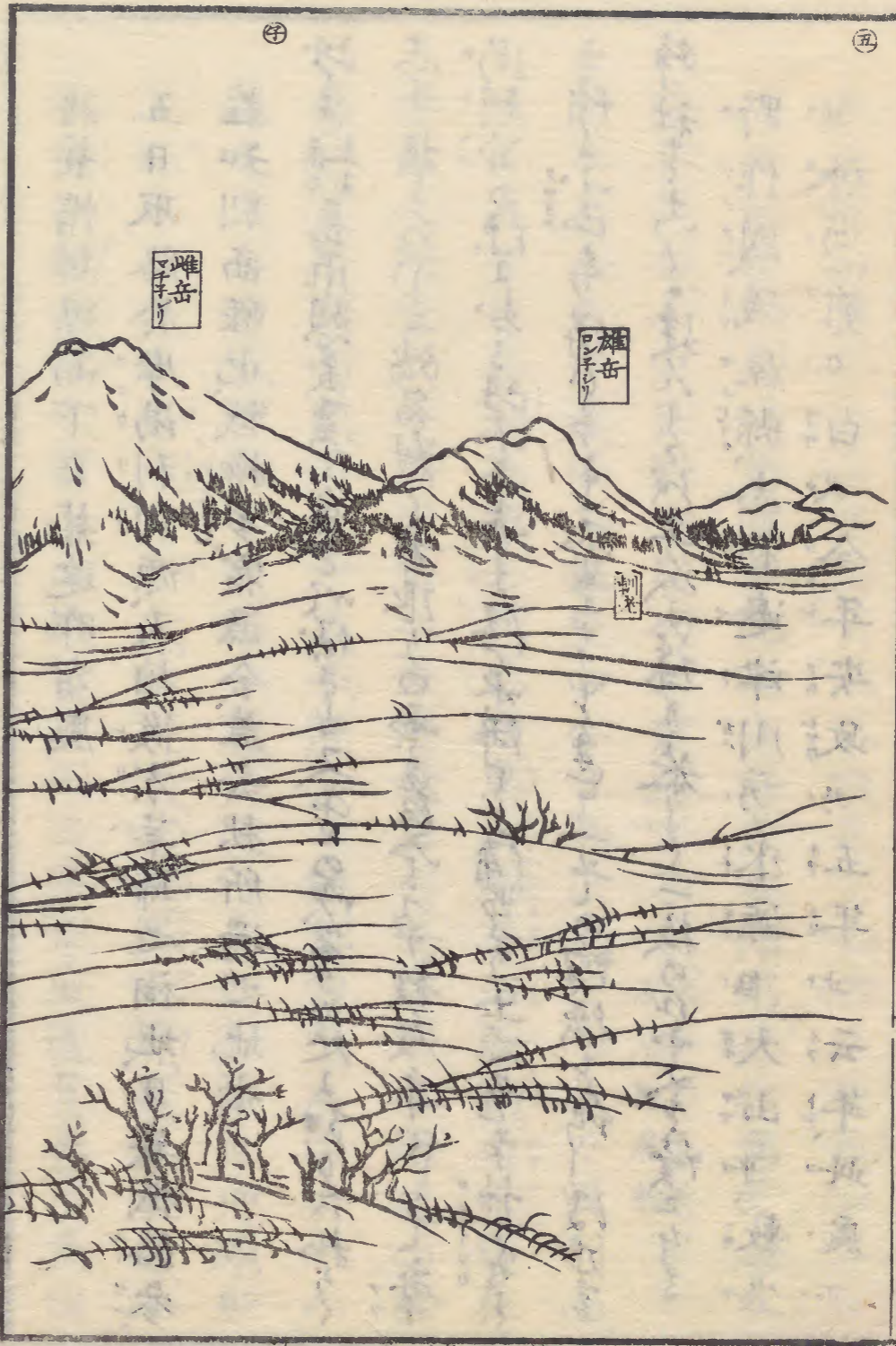
渴利別源の原よ、ある此水、平年、法泉、沸く、と、涌出、り、土人、是を、神水、と、云、傍、よ、小山、と、ツ、保、ひ、ら、る、を、お、よ、エ、ナ、ラ、を、ま、ま、て、一、そ、の、樽、標、を、取、り、は、乃、羊

蹄社、を、ま、ま、と、建、ん、と、は、土、人、は、縁、り、恭、く、一、枚、の、祭、文、を、積、上、な、る、

野作國、儀屋縣、志利邊、津川、乃、水源、能、大山、中、敷坐、須神、乃、前、白、久、今、年、安、政、乃、五、年、止、云、年、此、處、

山ノ神ノ事

山ノ景
五



山ノ景
六



網根 鎮理 須如 依豆 人等 頭等 仕奉 國爾 乃由 始豆
 昆虫 定理 如此 恐豆 古昔 爾請 渡來 由波 豆宮
 乃災 大坐 稱白 止加 利神 氏神 在予 弘伊 柱太
 無久 今豆 齋奉 乃御 此山 神祠 悔美 國内 拙又
 天乃 去前 波浪 萬代 後方 乎乎 惜美 乎劣 立豆
 血垂 此國 易事 無久 羊蹄 定奉 箱館 歷覽 後方
 飛鳥 乃乃 無久 稱奉 山能 西東 乃水 乃神 羊蹄
 乃禍 家地 久平 久安 以豆 乃海 乃御 乃人 能大
 無久 波下 久安 久白 稱奉 邊爾 守舍 波一 列尔
 他國 津下 久安 久白 稱奉 邊爾 守舍 波一 列尔

利相 國相 乃狹 乃大 國大 乃大 乃大 乃大 乃大
 取作 繁立 山乃 乃大 國大 乃大 乃大 乃大 乃大
 成幸 取作 繁立 山乃 乃大 國大 乃大 乃大 乃大
 守尔 守尔 守尔 守尔 守尔 守尔 守尔 守尔 守尔
 浦竹 浦竹 浦竹 浦竹 浦竹 浦竹 浦竹 浦竹 浦竹
 四郎 四郎 四郎 四郎 四郎 四郎 四郎 四郎 四郎
 源弘 源弘 源弘 源弘 源弘 源弘 源弘 源弘 源弘
 恐美 恐美 恐美 恐美 恐美 恐美 恐美 恐美 恐美
 白須 白須 白須 白須 白須 白須 白須 白須 白須
 伊勢 伊勢 伊勢 伊勢 伊勢 伊勢 伊勢 伊勢 伊勢
 國人 國人 國人 國人 國人 國人 國人 國人 國人
 松乃 松乃 松乃 松乃 松乃 松乃 松乃 松乃 松乃

字根大... 建人心... 神日存... 守人

竹源寺志

依了上人号中上常不乐见定山时
産成亦上土のりる人き第一も幸の時
もろ地踏生ひ一炊の火を燻と成種
八日收時相明かまよ山より以下も踏
いて歩り括を種けふらベダヘウ己上の
云く志の牙は天狗岳岳サツホロをラツカタサ
岳^{サツホロ}とてさふあううさうり以下中
予^{ツツ}籠揚く翅のやう足又もかこい
と^{サツホロ}中へ峰を裁らるる^{ツツ}思ひん
あつ時刻もよきんも一宿せん^{ツツ}と

楫 幾とゆるく

水の上にとらる
舟の形也
カカシキ

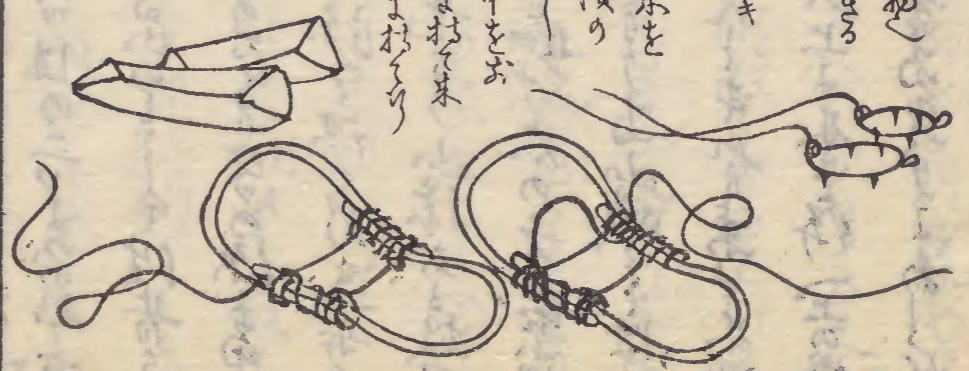
橈 カシキ
舟の形也
カカシキ

舟の形也
カカシキ

舟の形也
カカシキ

昔ケリ

麻の皮とて作る
中なる物とて鞋
のはゆるく作る



の中もト子ニハク^{コウ}嶽^{ニヤガ}の^{イナキ}嶽^{イナキ}とてかき雪を崩きよの穴と率と云う二足の
獵火を入りて是れ奥深き思ひん^{カラマツ}とて思ひん^{カラマツ}とて思ひん^{カラマツ}
竅き産壁を合へる降枝く^{カラマツ}とて思ひん^{カラマツ}とて思ひん^{カラマツ}
と思ひん^{カラマツ}とて思ひん^{カラマツ}とて思ひん^{カラマツ}
追く行路入雲烟糧盡山中憶悄然千島熊踏耳曾熟雪崖認
跡口流涎

一同の者何れも書かぬ^{ミシバ}問ふ故^{ミシバ}とて思ひん^{カラマツ}
君を程^{ミシバ}喰わく^{ミシバ}何を獲^{ミシバ}喰わく^{ミシバ}何を獲^{ミシバ}
山より^{ミシバ}夕方^{ミシバ}經^{ミシバ}四足^{ミシバ}を^{ミシバ}取^{ミシバ}り^{ミシバ}来^{ミシバ}ぬ
九日^{ミシバ}如^{ミシバ}前^{ミシバ}風^{ミシバ}雪^{ミシバ}を^{ミシバ}あ^{ミシバ}我^{ミシバ}の^{ミシバ}座^{ミシバ}中^{ミシバ}は^{ミシバ}休^{ミシバ}ふ^{ミシバ}人^{ミシバ}号^{ミシバ}山^{ミシバ}は^{ミシバ}又^{ミシバ}經^{ミシバ}二^{ミシバ}足^{ミシバ}經^{ミシバ}定^{ミシバ}

九

シヤチリ アツケシ
方言 アラタコタンノホシダ 西の
大き 五寸 細く 長く 跳はる 駆はる
疾く 飛ぶ 灰も 跳はる 毛を 浪
毛に 濁る 浪毛 毛の 濁る 濁る
異 余と 毛を 跳兒 北は 濁る 濁る
灰 中 濁る 濁る 濁る 濁る 濁る
何と 濁る 濁る 濁る 濁る 濁る

志保 林 沼 野
カセケル 西郡 エシラカ
毛 中 濁る 濁る 濁る 濁る 濁る
鼠 雅石 虎 細珠 濁る 濁る 濁る



南溪



アツポウ アツケシ
毛 中 濁る 濁る 濁る 濁る 濁る
鼠 雅石 虎 細珠 濁る 濁る 濁る

南華逆史圖

南華逆史

シヤチリ一足をねりゆりしと熊の頭をえり何と近くもあらずと申す
 十日杖鳴きついでし熊の頭をえり一回大に吼ひしを憶て岩谷よりや
 大木の根に向りたれとあらず余も二三歩もあらず上り傍観する
 一同の老穴の口より木を切是を差しけし熊も申しとあらず吼る大に前を
 後尾を振ひ二足をねりし穴の口より入るしとあらず捕らむ毒茶
 三四散り不然とあらず啼びて洞窟の奥より怪中へ入りしとあらず
 穴の口を這ひやん毒の瞑眩きたり吼ひ怒りて花出りト子シバク飛
 攔付しヤト子シバク脚をさし血をさし何と此へウレホめく兜熊のウレホと
云ふ人其は空の時必
やんくの首を腹に抱き互に力を競ふを櫛犬を収めて吠てあらず
 嗥付し熊は力もあらず衰ゆる戦栗まゝ吼るヤト子シバク山籠を抜く

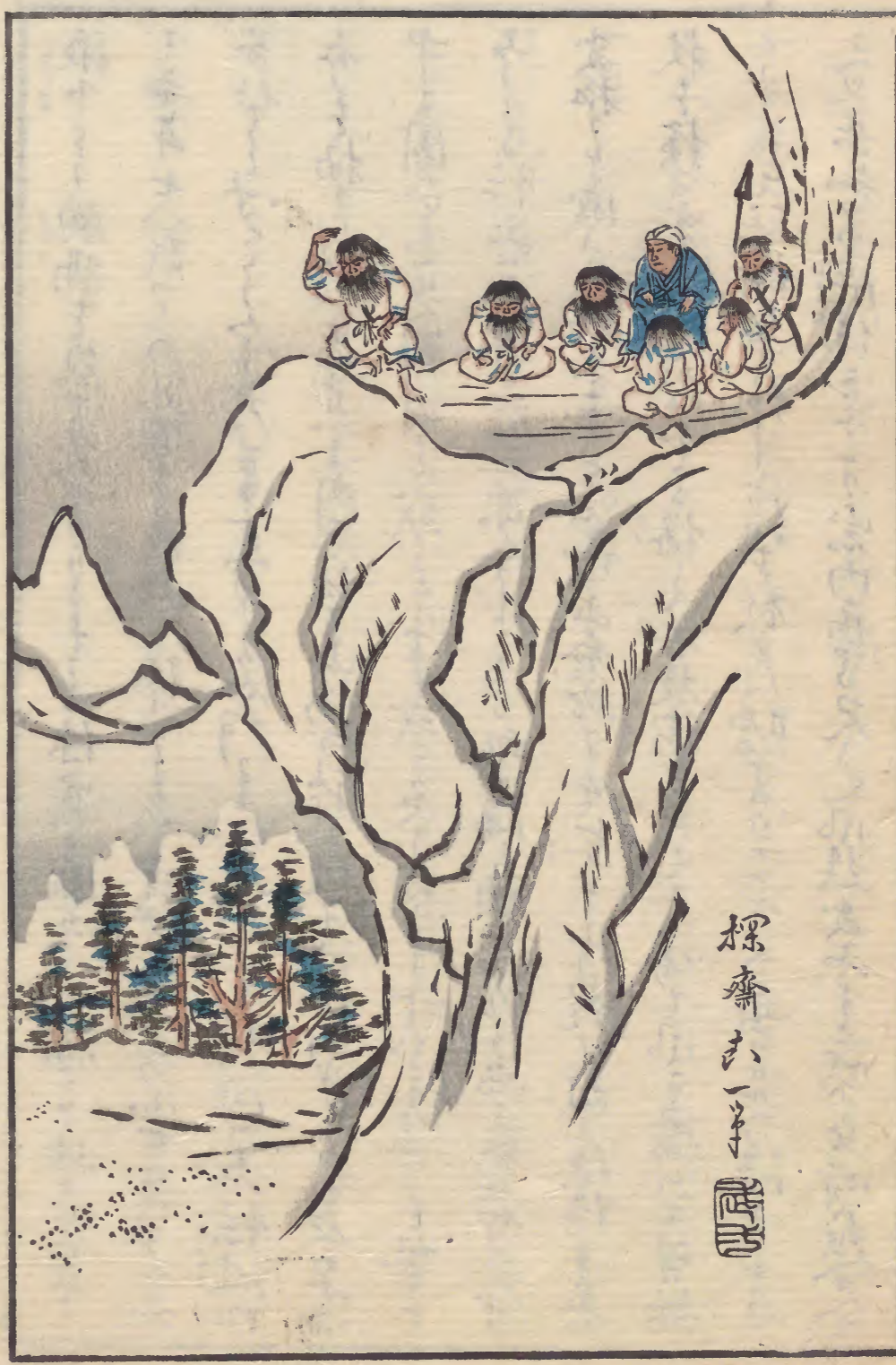
液下り胸膈を熱て突りゆりしと申す体寒感なきは條々此ト子シバク
 も毎年七八匹の忌置を獲頗る穢しやんをゆり此を山の中より去
 らねどもついでに今度運来りしや何れも忘るる時一同の老熊波の
 身を揚り後い先中一肉を切り山の神は供へ皮と肉半をお取の窟
 中は圍ひて先鮮肉を成すを中を成す炙り物と十分を喰ひて
 上りし時各の鬚は腥血凍令し血は顔に色作し画鬼のやんぞり
 皮松毛を成しし振束をとりしと申す山倉路よりと上り程一故は後後を
 杖を横に突きて持ちしと申す善提樹と申すも構を風は靡れて皆掃
 くりしと申す樹木も絶りしを成すは西のチロウエシリッ岳ヲサルヘッ源トクレラ
 ニッ岳知る混保シ子シリ岩内岳よりん風烈髪を以下を時思ふ


控乃即之
 大なるも
 邪まて
 かのつもの
 一ゆけ筆
 希まもの
 居ま
 一毛と禮
 右敏



十六

山方
 山方
 山方



探齋
 一筆


ひさかた松葉の玉極此をくともを吹拂て保く保まき歩け能きふも
とらうまきと上や廣平のふり刻た大忠うまうとふあまき物の有きん
うらうま近付る人とは皆五板の橋松ふあ海かりく故まき近し踏如
のりく徳道も首ふふまき吾く何もま精風を何風も定まき人
翹風ヒヤクのやくまを被揚一面に吹くやく足も定まきあり口も挿通モトウり
難くは迄快味と心ヒヤクりあも忽暗く忽明くま愛約定りせたの方をん
うらうま余う通ふふ鳥帽子の政の如きふく下敷百丈の政崖一ツ風
ま吹倒れるなな危な首うくま峻崖をんてり身む程戦慄一今自
如此危ふも通ふりあまは是を何あまやらん中々首首政をんや
何あま心を取らまき起つ踏り子にうりや怒らまはうた

時トキももねんとふふまき月さの木幣エナラを立保勢両皇太神并大
日本解夷熱國中大小の神社ふあふふの山盡此度の山越を程は成さ
め賜へ此度ん此の新送成就の時ふあふふ一社を建て永く南山の鎮守と
うまきんと斗柄を抽て一心は怒りく白く政を奉まは回や製時よ以掛
うらう四方を眺望まきま子のふ針よムイ子ビヨイサひきて奥平シニマンホリノシトラ岳名岳良の
方よ不将の平野果もまきを越く増毛岳マシケ岳シヨカンふ岳ヲシラ
リカタツミ實タツミおまき事務の方よ突出ま堅タツミまわりユウバリ岳サルボクタツミの山く己年よ家
親岳もあま天狗岳遙は隔く年来よ白老アソイワ字波濤のやく一掛
一示さまき方よ又ふの以來ままんと
まきまきと通ひぬ山のたむらやとたて天さのやまかま

山形縣志

嘗て成を水派山脈の足近を付武と百万りし体を一因の志余と向て云
 々は君と少は然てさう夫れなり先の子を属し語りし事故に日
 如く嵐まきひりて此度山越まの時も必き自れと先の子を語りて
 何れ彼も心快くと深く我を戒めおぼしむを撫さるゝ大船を沖業を
 より先の日教を官事と^{フナカガ}舟夫を志さるゝをわしは是も利同しつゝを
 々々相そらう木立系^松の険不十余可なるまらした山の猿を風吹
 も極うけれも宿るぬん青の飽もを鮮肉を吃てきき^成志^成て以て保らうりり
 鳴箭飛鎗勢已遮豪羅一怒震天涯毛人自存傳家毒鮮肉今
 宵到齒牙、

十一日ヶ別をぬ小倉の船より目を閉て旅を志の別とて用き敷園化

概帳妻松本飯松橋木立のるをわんく一面のゆきよ埋けなを上
 中下色返来りよ木の子より一箇の川と最なる^{ニシケレ}川をわんく大さ
 加すも程に跡をぬれを先水と成て五日振とをを春^{リウツイ}と^ナ道
 川余も始り水の貴きつりや怪らぬ概此の中のをまなな苦味あり概^{カク}
 中なる人よ問へは是も概帳妻松子の^{トハニ}山のまらけに苦味あり概^{カク}
 概樹^{トハニ}の育る山の水に甘美くとありまを概^{カク}思^{カク}る概^{カク}の山のま何事概^{カク}
 もとて入てさるが^{カク}を概^{カク}おく人まな能く^{カク}み^{カク}る^{カク}道^{カク}窮^{カク}理^{カク}き^{カク}者^{カク}も^{カク}
 の^{カク}り^{カク}よ^{カク}以^{カク}余^{カク}種^{カク}を^{カク}土^{カク}人^{カク}の^{カク}方^{カク}も^{カク}益^{カク}を^{カク}得^{カク}る^{カク}事^{カク}也^{カク}
 ぼ石将とも此川の名を^{カク}ひ^{カク}よ^{カク}イ^{カク}ハ^{カク}ラ^{カク}マ^{カク}ヘ^{カク}ツ^{カク}と^{カク}云^{カク}た^{カク}の^{カク}方^{カク}の^{カク}川^{カク}を^{カク}シ^{カク}ケ^{カク}レ^{カク}ヘ^{カク}ニ^{カク}ウ^{カク}レ^{カク}し
 云々一性年近友を某津石村より桑鏡の川も^{カク}シ^{カク}リ^{カク}ヘ^{カク}ツ^{カク}の^{カク}川^{カク}く^{カク}世^{カク}心^{カク}助^{カク}を^{カク}載

山形縣志

後方羊蹄北

あうねおろり

あさきれ

沖よめ

のほろ

月ま

白山

① 三ノノリ

ろくろ源

② ニノノ源

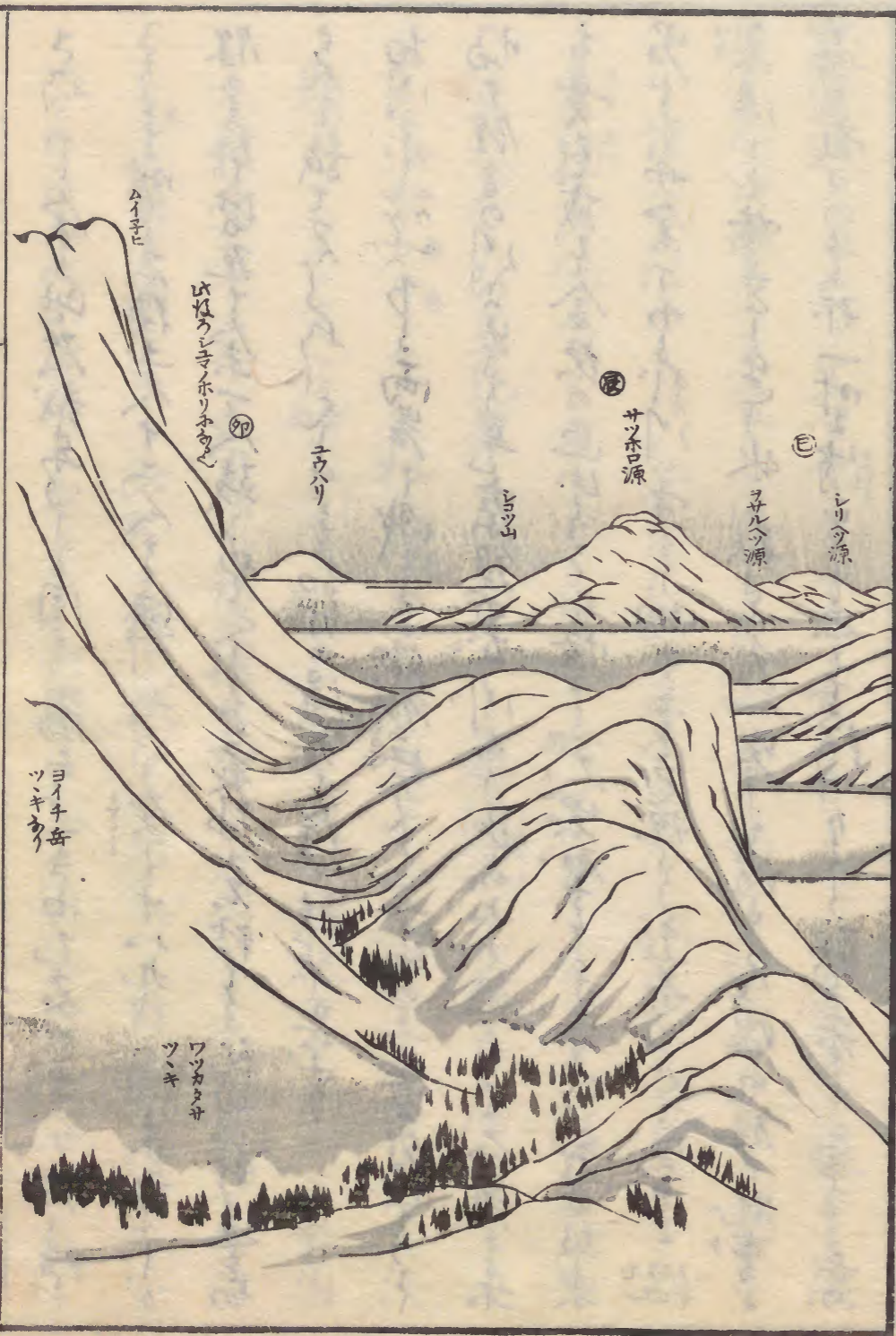
アノノ源

白岳

③ トノノ源

天竺山

辛ノノ源



山形縣志

十

山脈連延

ふりし余り此度越来りし同筋ありき由乙名ルヒヤンケツイン
ほうりし時と不将士人十二人を連しり余り十八九才の時と有り
能の志と皆死て余一人残るゝとを言はれし不将より託田の所道を切
らん載てらんれくんと主切才の得失を極く修し是より

相門すニウレヘリ西岸の岬こゝ経路は狭く一ふ氷の上を年毎迄下り
幅十餘百の川よ出り是系鏡の本川あり氷の上を越るゝ西岸と未
も貴を或と金銀の画山も怪し大岩壁も下り通し新き故東
岸よりサ余下り氷川の中より相の志を思ひ主考する人思ふ温
泉沸く噴上り氷も融るゝ一宿の宿を温るゝ温るゝ皮膚は
遠く数日の事外一時は消さるゝ思ふ所あり改を奉るゝ安平岳の

山脈連延とてあり思登りしとて如く實は身とて一相聖朝起て被りし温
泉も是れ温泉の遺蹟も温るゝ氷も融るゝ宿の宿を温るゝ温るゝ皮膚は

煙火をばあをみ人思ひしとて上の旅路も是れなり

系鏡の源のつりしレケレニのこ段なり上よカモイセイとて性古神と切

てりホリカウエンサツホロ本通サツホロ西とニアる何れも系鏡なり

山頭をシリベツヲサルヘツ西シユマツラ東等の原く頂上は一株の葉樹と数圍
して枝葉牽のやむおろし何の代の物とて以て是れ是れ大古神と日本
のニイの能き國と云り此地も極く試んを持たるゝ由云傳ふ文化に
サツホロの山人は頂上より系鏡を捉えり人よんも楠の由此地は楠の

山脈連延

廿

山形県志

河は不思議なるを、其地は一株の有る所を、

十二日快晴東岸を下る川向ヨイチバヲマナイ勝本岳岳エキンヨマサツホロ川ウハ
トラレ川此不帯を打置きたる如大岩壁なり其岸ヨラツチン山ラウ子ナイ川
も西岸ベンゲチライ川中バンケチライ川チヤンバロマンベツ川能よ成なる又東
岸ヨニセイケマフナイ崖の上川此不川中え岩あり大岩壁に匍匐一越り又
イトロマフ大崖此ふよ昨夜人宿り此を越りてを、
去りて昨日の杖タルマイ越る百連一フクスケと云、若くしてヲカル川
此ふ不絶壁の上を越てタンチハツタラ水淵の上よ出想く此を平地と成り
難本立敷里の系西ふよ山を負ひ和暖く、空閑きを烟地と成り宜
又西岸ヨエンカル山ベ山と云山と根本をく経る、山重著、由りて人



梅子画

山形県志

寄所く伝作さう余を此ふは極者惣録のつぎを建人とも達白をを儀
 ありし香をひひるてコレナイ東と云ふ者今日の及重徳に在る位ある候事なり
一日に來るや肉を耐と大等よりして
 大程不に里を二日も想へりしと云ふ此屋東のり是近人の知りしは此屋友余の所持
 て候りしと云ふ湯屋人の知りしと云ふ是と云ふは其の道を行くに遠く候るやねシリヘツ越
 の者ふとも候る 今秋に櫃の木もやな只東中よに候りしと云ふ
 十三日秋末より以重被りし法衣の上を寸斗様を甚くうす余に
 ちの障り初の時より大を抱き候りし候りしの中は後きしり向寄り越人
 しきりん此を川の氷融りし加劇し浅瀬を足主候りと云ふ也五の足
 も踏ゆは是先恰切りやく是女是く是母より向寄り越せり也赤成て
 腫を歩り難きを候りしを曳きて廿斗斗りし余中よ少小屋を足附りし是
 又ツホコナイ小く云別櫃トヒヒラ木の小屋のあひま候りし何れも知りし者より云ふモ二

カア・レイ

潭ヒキ本丸丸又又法ヒキと社ヒキと云ふ方よを木
 にはあつたをよははを修ヒキ補の中よ是は路はく
 子時ヒキは一張を纏候りしと云ふ一節を結は纏
 放りし本浮ヒキんをを補ヒキりしと云ふは是を
 云ふなり
 シコツヒキと云ふは厚始めし是を初めしと云ふ
 本に纏ヒキは字よを考ヒキりしなり



丸丸と極を候りしはありしなり
 子や大木を亦本ありしはありし
 必き補の中よ是を結はく

二二
 二二

ラマに討ち入りお互に夢の心地一歳子狩りの事も及びと潮を吹き返すの香と
今朝の冷さと志を彼等も^{千難}ずかしく由おのれおとと落葉^カの干^{カウホ}を煮て出む
是由の半粒くと物案内を教出するに途中瓶をいんり敷寸定然と人甲
近きふの瓶を目す^一一枚も捕獲さうりサウリシトニホロトニホロと氷の
る小瓶を尺附し是^のゆのよゆもあつたにやうしてて子ウへハチトラに^の
ハシヤム^ハ本名のシヤムと云桶等のあははるるものや^のや此の^の杖引^の
の本任子に於いて去斗に^の松を束にう束を知合アイクリテの家と云き
よあの前より白鬚多くうりれを是と一羽をいんりぬる^のな^のコシ^の弾輪^を巻^の
小川は^は熱^の一羽を^はる^はは^の是^のシ^のコ^のシ^のと^の信^のを^のや^のの^の始^のは^の取^のは^の仁^の熱^のあ^のに^のや
十四日^の晴^のま^のる^の持^のは^のい^のん^のる^のを^の淡^のま^のれ^のと^の此^のの^のの^のと^の退^のは^の地^のの^の融^の解^の

危う放漢由よりうりて教書うるが由ま^の一文^の字^の面^のの^の方^を指^を出^をる^は懈
柳糸^のを^の朽^の木^のは^の何^の々^の毛^の物^のの^のり^のり^の又^の尺^の附^の是^をを^をい^をん^をり^は一^の只^の木^のの^の杖^をと^一打
た^のゆ^のは^のな^のい^のる^の首^のう^のり^の今^のの^の挽^のき^のす^のと^の燻^の燻^の比^のハ^のお^の人^のは^の向^のや^の漢^のも^のを^のい^の
初^のう^の者^のお^のは^の或^の人^のの^の信^のら^のり^の東^の筋^のア^のツ^のケ^のシ^のは^のあ^のま^のき^の由^の表^のて^のア^のッ^のホ^のウ^のと^のを^のい^のり
^はる^の本^のは^の九^の十^のを^のと^の
^ある^の名^のを^の注^のを^の取^のり^の半^のは^の
この由を^の酒^をを^のせ^をひ^を政^を一^の本^の幣^をを^のひ^をり^の山^の海^のの^の計^をを^のお^のり^の一^の回^はあ^の極^をを^のか^り
て^は此^の代^の料^をを^のす^のは^の一^の升^は百^の文^のの^の由^は是^のの^の大^のお^のる^のま^のる^の其^の大^のあ^のる^の箱^をを^の一^の足^を
す^のは^の一^の者^をを^の賞^のひ^を其^の由^をを^のす^のは^の是^のの^の箱^を代^の味^を代^のも^のあ^のる^のは^のさ^のま^のが^の朴^があ^るる^のや
實^のを^の感^をま^をる^のは^の故^をり^の酒^の代^のの^の高^をま^をる^の人^をも^のあ^るる^の入^の和^をを^のる^のは^の瑞^をも^の振^を度^を
こ^のら^のけ^をも^のを^のり^のる^のの^のし^のる^の想^をて^の此^の地^のの^の自由^をを^のい^をり^のも^のあ^る

驚津宜曰
 蝦夷之俗
 古強暴而
 今柔順古
 難制取而
 今易役使
 相反如別
 種然蕃史
 曰羅刹人
 往=雜居
 蝦夷之地
 日本有一
 神將擊而
 驅之蓋謂
 坂上公也
 據此則當
 時強暴難
 制取者是
 羅刹人之

附錄

知別者在西蝦夷磯谷縣距海門十餘里斷崖壁立水勢瀉瀑
 今茲五月泛舟將遡行三日許不遂志而歸再到岩内衝凍雪
 披荊棘三日漸至知別河上此地融泥深不能攀蓋岳東也
 然而雪水已漲水源難窮亦不得志而歸初間宮最上近藤三
 士雖有窮源之意不能達焉定知此夷地為無双之險也
 安政丁巳八月念六日雇土人四名於東郊虵田到知別西崖
此地路參令土人剗木為舟余乘其間挾持二人上河畔三日遂窮
 源而歸
 八月二日又順流而下水勢疾於矢多大石激浪如噴兩岸樹

後方羊蹄日誌

相破の浦の所人聞きしを聞くと云ふの故に
 我を彼等の車座に我も班り其蓋をとり持飲茶をたふ取土人風
 流を先始の一滴をルーチンの神へと次よトカチ越神へと云ふ一同は
 去りし君是かトカチへ越るまうと余も教を舟りまう
 後方羊蹄日誌 大尾

種類非本
土之俗可
知

東園評職
方地理所
不載者多
悉志樓善
述之暇夷
地記之可
觀未有過
於此書者
事開拓者
不可不讀
此等之書
也

木翁蔚不見日光、但見羆熊豺狼、又有鳥大如鷓、而頸紫紅、
白背黑者、土人喚鐵哥、其餘山翠、日光カウケ、水乞鳥トウカラレコ、花班鳥キヤウシキカラ、與薩サツ、
川鳥カウケ之類、余所未見也、夜宿察敵綿、見難鯨產卵、命土人又之、
忽得數十尾、其易如以手、
三日早發、到纒井茶ホロイチャ、此地兩岸縮蹙、水尤狹、派尤急、同行皆上
岸、取糧食、及食器、于舟中、各提之、虛舟順流而下、數丁、水漸廣、
流漸緩、又就舟載所提之器、有鹿以毒箭斃之、質地名于土人、
即嚮余所泊之宗附河ソウツク岸也、日方頃、投宿岩內首長イロノ計世辦之獵
舍、去夏有人住、今也則亡、屋大廢、壁上有岡田某岡田郎次題詩曰、
雪岳冰山銀世界、白雲深處別開天、一掾茅籠生涯足、疑是夷

晚退猿愁芳切
山溪迴石亂水
澗深方知造物
千年秘達着奇
人洩世間

長戸謹
印



法眼永秀

長戸謹

廿五

翁即地仙、併去歲余所和詩亦隱、可讀曰、猿攀蟹步十餘年、霜苦雪辛千島天、健脚自期僧小角、任他人喚做蝦仙、此夜野狐欲貪我糧食來數矣、四日黎明發舟、水底其深不知幾千仞、水聲瀧、驚耳、既而兩岸犬牙參差、土人喚之仁勢、計升摩、岩石峭立、又上食器於岸、曳舟而下三丁許、兩岸如前、如此者二次、水愈險、石出如劍矛、於是神悚胆悸、土人製木幣以祈岳神、自此土人乃繫繩舟首、引諸樹杪、舟乃立、自舳推之、弛繩則既過險矣、如此者數次、日方暮、宿斷穴底、五日下午急流一里許、水聲瀧、驚耳、土人喚之武伊羅、日暮宿

松浦生身
藏一具仙
骨加以大
胆健脚視
險危如坦
途人皆心
寒股栗生
獨堅忍不
撓山必攀
其頂巔川
心究其源
委巨細悉
筆而無一
語涉虛飾
者蓋志有
所在而然
罔不暇雕
琢字句也
松園道人
誌

樹下、夜雨暴至如傾盆、寒風砭肌、手龜、衣濡、欲就火、薪温不燃、覆欵冬葉、代雨衣、立而待曉、舉頭則岳巔盡白、愈知寒威甚、以昨所捕獺肉、不熟而食之、餘肉則備午餐、六日急流如前、余久在此險、心神殆不安、出針盤檢之、則岳北也、山皴不可辨、知離岳稍遠、日暮見小川於西方、土人悅曰、是磨碣利別也、明日必到昆保、往年蛇田土人造舟於此、地到礮谷、厥後無能至者、經宗附到于此者、開闢已來、益余一人而已、豈不愉快哉、昏黑宿于此、七日下午急流三處、到昆保河口、水勢稍緩、喚武伊羅者五而已、宿柳多、

寂後及相。有氏與。追奉。府氣
謹制度。事簡折。腰服。至。二。百
年來。不改。物。近。業。小。壯。之。規。吾。邊。
官。急。報。疾。克。屏。護。更。遣。中。令。為
之。監。擇。水。字。受。擢。久。任。南。粵。在
出。偉。丈。夫。生。來。猿。情。魚。勝。具。情
。 魁。首。尾。河。足。之。 慨。夷。向。背。通。美
步。一。國。夷。情。請。其。錄。予。為。海。物

同。子。屠。華。部。風。土。記。已。集。中。控
圖。畫。又。詩。句。共。是。國。字。多。用。書。
熟。之。可。以。實。友。庫。家。從。來。由。跋
卷。尾。予。里。隨。讀。計。北。從。文。久。新
元。從。暑。至。田。節。江。都。槐。山。居。士
大。以。序。撰。并。書

